

マルクス出版社の『ゴーゴリ著作集』

大野 斉子

はじめに

長く読み継がれる文学作品がある。学校教育で子供たちが学び、公共図書館に必ず設置され、古典と呼ばれる文学作品である。それらの大半は確かに話の面白さや言葉の魅力、すなわち作品自体の力によって読者をひきつける。しかしなかには多くの人々に古典作品として認識されていながら実際にはほとんど読まれない作品も存在する。あるいは同時代に人気を博して後、一度は古典として確立したかに見えたが、次第に忘れ去られてしまった作品もある。

一つの文学作品が古典であり続けるためには何世代にもわたり読者に読み継がれなくてはならない。読み継がれるうちに時代は流れ、一つの作品の意味も刻々と変化する。例えば同時代には若者向けの風俗小説だったが20年後は回顧的に読み返され、50年後には昔の面影を伝える歴史資料として扱われるというように。作品は時代ごとに意味を更新され、そのたびに異なる読み方をされる。しかしこの更新は決して自動的になされるのではない。例えば出版者が10年前のベストセラー小説を復刻するとき、あるいは文学研究者が半世紀前の作品を再評価するとき、そこには必ず明確な読み直しの意図がある。

ロシアの文学作品も古典として文学史を彩るまでの数十年の間に幾多の読み直しを受けてきた。そうした読み直しの作業には政治思想から歴史観、出版状況、初等教育の普及率など読み手の関心事や時代ごとの社会的要因が色濃く反映する。文学作品がいかに読まれたか、どのような意図によって出版され評価されてきたのかを追うことによって、作品に対する時代ごとの眼差しを捉えることができるのではないだろうか。

このテーマを考察する題材としてゴーゴリを扱うことにする。ここでなぜゴーゴリなのかを説明しなくてはならない。ゴーゴリのように同時代から現在にいたるまで常に人々の関心を引き続けてきた作家はほかにもいる。しかしゴーゴリの作品を扱った出版物は非常に多様である点で際立っている。著作集や定期刊行物での掲載はもちろんだが、特に19世紀において単行本に載った膨大な数の挿絵やイラストアルバム¹、一部を意図的に改変した海賊版などの二次的な出版物がゴーゴリほど多く出された作家は珍しい。

¹ ゴーゴリ関連のイラストつき出版物に関しては、*Коростин А. Ф., Стернин Г. Ю. Герои Гоголя в русском изобразительном искусстве 19 века // Литературное наследство. Пушкин, Лермонтов, Гоголь. М.: АН СССР, 1952. С. 837-892.*に詳しい。

これらの出版物の中には出版された時代の書物の特徴や読者層、出版の意図を色濃く反映しているものがある。そうした時代を代表する性格の出版物から一つの作品が時代ごとにどのように読まれ、いかに文学作品としての意味を更新していったのかを読み取ることができる。

この研究の一環として本論文では、A. Ф.マルクス¹出版社の発行したゴーゴリ著作集を取り上げる。マルクス社は1870年代から20世紀初頭にかけて『ニーヴァ』という当時としては時代の最先端をいくイラスト週刊誌を発行する傍ら、ゴーゴリ作品を多数出版した。500以上のイラストをつけた豪華本の『死せる魂』やナロード向けの安価な『ゴーゴリ全集』、徹底した校正を行った『ゴーゴリ著作集』、『ゴーゴリ書簡集』などマルクス社の出版物の目的、価格、体裁は多様であった。

どの本も独自性が強く研究対象になりうる。だがゴーゴリ作品の出版史という視点で見たとき、それ以前のゴーゴリ出版物とは明らかに異なる出版方針の元で発行され、一つの転機をなした出版物として以下の二つがあげられる。チホンラボフ²とシェンロク³によって編集された『ゴーゴリ著作集』(第10版)⁴と『ニーヴァ』の付録として発行された『ゴーゴリ著作集』(第15-16版)⁵である。前者は内容の充実度で際立っており、後者は『ニーヴァ』と密接に関わり、未曾有の発行部数を記録した。出版の経緯と『ニーヴァ』との関連を追いながら、マルクスがこれらを出版した意図とこの出版によって新たに生じたゴーゴリの読み方について考察したい。

¹ マルクス Маркс, Адольф Федорович (1838-1904) 出版者、書籍商。シチェツインのドイツ人の家庭に生まれる。1863年からペテルブルグのポリフ書店の店員となる。独立後、1869年からロシア初のイラストつき週刊誌『ニーヴァ』を創刊。Книговедение : Энциклопедический словарь. Под ред. Чхиквишвили И. И. М.: Советская Энциклопедия, 1982. С. 334.

² Тихонравов, Николай Саввич (1832-1893) 文学史家、古文献学者。アカデミー会員。モスクワ大学で教鞭をとる。ゴーゴリ研究に携わり、マルクス社発行のゴーゴリ著作集の主任編集者を勤めた。История дореволюционной России в дневниках и воспоминаниях. Под ред. Зайончковского П. А. М.: Книга, 1981. Т. 3. Ч. 3.

³ Шенрок, Владимир Иванович (1853-1910) 文学史家。チホンラボフの死後マルクス社のゴーゴリ著作集の編集を引き継いだ。ゴーゴリの伝記の執筆、書簡集の編集も手がけた。История дореволюционной России в дневниках и воспоминаниях. Под ред. Зайончковского П. А. М.: Книга, 1980. Т. 3. Ч. 2. С. 277.

⁴ Гоголь Н. В. Сочинения : В 7 т. Под ред. Тихонравова Н. С. 10-е изд. М.: А. Ф. Маркс, 1889-1896. 1842年に出版された『ゴーゴリ著作集』を初版と数え、その後版を改めて発行された著作集を順に第2版、3版と呼ぶ。出版社が異なる場合もある。

⁵ Гоголь Н. В. Сочинения : В 12 т. Под ред. Тихонравова Н. С. 15, 16-е изд. Спб.: А. Ф. Маркс, 1900-1901.

2. 『ゴーゴリ著作集』の出版

『ゴーゴリ著作集』第10版

マルクスは1890年代に古典作家たちの文学作品集を次々と出版した。1891年の2巻本のレールモントフ作品集に始まり、1892年にグリボエードフ、コズロフ、コリツォフ、ポレジャエフの作品集が出版された¹。

この活動の中でマルクスはゴーゴリの著作集の出版に乗り出した。まず1893年に出版者のドウムノフ²からゴーゴリの独占出版権を15万ルーブルという異例の高額で購入した。ドウムノフはチホンラボフを編集者として『ゴーゴリ著作集』第10版を出版する準備をしていた。この企画をマルクスは譲り受けたのである³。そしてチホンラボフと新たに契約を結び、彼を編集者として出版の準備を進めた。

マルクスの『ゴーゴリ著作集』第10版の出版は1889年に始まった。1893年に編集者チホンラボフが没したため出版は一時中断したが、1895年にシェンロクに引き継がれ、1896年に完結した。全7巻中チホンラボフが1-5巻を、シェンロクが6-7巻を編集した⁴。この作品集の最大の特徴はテキストの正確さにあった。チホンラボフとシェンロクはテキストを保管されていたゴーゴリの自筆原稿や初版本と照合し、全編にわたって詳細な注をつけ、テキストのバリエーションを集大成した。第10版は学問の分野でも高く評価され、革命以前のゴーゴリのテキスト校訂学の最高の到達点というゆるぎない位置を得た。また、第10版を見本に編集したゴーゴリ著作集が出版された⁵。第10版はゴーゴリ作品の出版史においても重要な位置を占めるものだった。

第10版の成果は、その後のマルクス社発行による『ゴーゴリ著作集』⁶に適用された。『ゴーゴリ著作集』第11版¹をはじめ、その後、数十年間にわたり多くの種類の『ゴーゴ

¹ Динерштейн Е. А. А. Ф. Маркс и русские писатели // Книга : Исследования и материалы. М.: Книга, 1976. Сб. 33. С. 133-134.

² Думнов, Владимир Васильевич (1854-?) 出版者, 書籍商。1885年に出版社「Наследники братьев Салаевых」の社長となる。学校用の教科書などを出版した。Книга : Энциклопедия. Под ред. Жаркова В. М. М.: Большая Российская Энциклопедия, 1999. С. 202.

³ マルクスとドウムノフとの交渉, チホンラボフとの編集作業をめぐるやり取りは Динерштейн Е. А. «Фабрикант» читателей А. Ф. Маркс. М.: Книга, 1986. С. 98-112. に詳しい。

⁴ Рыскин Е. И. Основные издания сочинений русских писателей : 19 век. М.: Гос. изд-во культурно-просветительной литературы. 1948. С. 90.

⁵ Гоголь Н. В. Сочинения и письма Н. В. Гоголя : В 9 т. Под ред. Каллаша В. В. СПб.: Просвещения, 1907-1909 や Гоголь Н. В. Сочинения : В 10 т. СПб.: Брокгауз-Ефрон, 1915. がある。 Там же. С. 90-91.

⁶ 『ゴーゴリ著作集』は、同じマルクス社から出版されたものであっても収録作品・形態は版によって異なっていた。例えば1901年に出版された第17版は、テキストそのものは第10版と同じだが、

り著作集』がマルクス社より出版された。このうちの 하나가『ニーヴァ』の付録『ゴーゴリ著作集』だった。

『ニーヴァ』の無料付録

『ニーヴァ』創刊の1869年から70年代にかけて、雑誌に有料の付録をつけるという出版方式は珍しくなかった。『ニーヴァ』にも婦人服の型紙や版画の有料付録がついていた。しかし80年代初頭にマルクスは出版方針を転換し、『ニーヴァ』の付録を無料に変えた。方針転換の主たる理由は、他のイラスト雑誌や文学雑誌との差異化を図ることだった²。このアイデアは見事に当たった。無料付録は多くの読者を獲得し、『ニーヴァ』の発行部数は創刊号の9千部から80年代半ばには10万部まで成長したのである³。

しかしすぐに多くの雑誌出版社が『ニーヴァ』に倣って無料の付録を付け始めた。そこでマルクスは更なる差異化を図るため、『ニーヴァ』の付録に文学作品集を加えることにした。1888年にマルクスは雑誌の値段を4ルーブルから5ルーブルに引き上げ、同時に文学作品の付録を初めて発行した。翌年はさらに購読料を上げ、代わりに二倍の量の付録をつけた⁴。

しかし、文学作品の付録も他の雑誌にすぐ模倣された。『ニーヴァ』が比類ない発行部数を誇ったとはいえ、市場における競争は常に厳しかった。『ニーヴァ』と『北方』『処女地』などの刊行物との間では人気作家の獲得競争が常に繰り広げられていた。その中で『ニーヴァ』は基本的な出版方針を大きく変えずに、しかも『ニーヴァ』独自の魅力を打ち出していかななくてはならなかった。これを実現するためにマルクスは付録の分量を増やし、掲載する文学作品の質を上げた。

1890年にマルクスは、年刊の付録を月刊に変更した。1894年には付録の数を12冊から倍の24冊に増やした。このうち12冊は90年に開始した月刊付録、もう12冊がロシアの古典作家の著作集『ニーヴァ文学著作集』であった⁵。

有名な作品のみを2段組で一巻本に収めている。また Рыскин, Основные издания сочинений русских писателей. С. 91.によれば、第12版以降は第10版の参考資料を掲載していない。

¹ チホンラボフが直接編集したのは第10版と11版である。この二つはマルクス社からほぼ同時期に平行して出版された。

² その他のイラスト雑誌には「Всемирная иллюстрация» (1869-1895), «Иллюстрированная неделя»(1873-1878), «Иллюстрированная хроника войны»(1877-1878)などがあった。Подобедова О. И. Гравюра и иллюстрация 1870-1880-х годов // История русского искусства. Под ред. Грабаря И. Э., Лазарева В. Н., Кеменова В. С. М.: АН СССР, 1965. Т. 9. Кн. 2. С. 185.

³ Динерштейн А. Ф. Маркс и русские писатели. С. 128.

⁴ Там же. С. 127-128.

⁵ "Сборник Нивы"というシリーズ名であった。Там же. С. 128.

『ニーヴァ』の付録はその後も量を増した。1899年の『ニーヴァ』第43号の広告によれば、1900年の『ニーヴァ』の付録は『ゴーゴリ著作集』全12巻のほかにも『月刊文学付録』12巻、『月刊流行雑誌』12巻があり、更に色刷り壁掛けカレンダーまでついていた¹。

『ニーヴァ文学著作集』の集客力

この豊富な付録の中で読者を最も魅了したのは『ニーヴァ文学著作集』であった²。文学著作集を付録としてつけて以来『ニーヴァ』の購読者数はさらに増加し、1900年に出版された『ニーヴァ』の付録の『ゴーゴリ著作集』の発行部数は22万4千部に達した³。

その理由の一つは、『ニーヴァ文学著作集』を飾ったのがみなそうそうたる作家だったことである。1893年から1902年の『ニーヴァ文学著作集』のタイトルを見てみよう。

1893年『ロモノーソフ、エカテリーナ2世、フォンヴィジンの著作集』⁴

1894年『Ф. М.ドストエフスキイ著作集 Сочинения Ф. М. Достоевского』⁵

1895年『Ф. М.ドストエフスキイ著作集 Сочинения Ф. М. Достоевского』⁶

1896年『Д. В.グリゴローヴィチ全集 Полное собрание сочинений Д. В. Григоровича』⁷

1897年『ボボレイキン小説集 Собрание романов, повестей и рассказов Боборыкина』⁸

1898年『ツルゲーネフ全集 Полное собрание сочинений Тургенева』⁹

1899年『И. А.ゴンチャロフ全集 Полное собрание сочинений И. А. Гончарова』¹⁰

1900年『Н. В.ゴーゴリ全集 Полное собрание сочинений Н. В. Гоголя』¹¹

1901年『Г. П.ダニレフスキイ全集 Полное собрание сочинений Г. П. Данилевского』¹²

1902年『Н. С.レスコフ全集・В. А.ジュコフスキイ全集 Полное собрание сочинений Н. С.

Лескова, Полное собрание сочинений В. А. Жуковского』¹³

¹ Нива. 1889. №43. С. 837.

² 毎月始めに一冊ずつ配本された。どの著作集もすべて12巻本だった。

³ Динерштейн. «Фабрикант» читателей А. Ф. Маркс. С. 103.

⁴ Нива. 1893. №51. С. 1188. 以下すべて定期購読の広告を参照した。タイトルは新正書法に直して表記した。著作集・全集・小説集などの表記は広告のロシア語になった。

⁵ Нива. 1893. №50. С. 1160.

⁶ Нива. 1894. №43. С. 1027. ドストエフスキイ著作集は94年に前半、95年に後半が出版された。

⁷ Нива. 1895. №47. С. 1134.

⁸ Нива. 1896. №49. С. 1223.

⁹ Нива. 1897. №51. С. 1222.

¹⁰ Нива. 1898. №47. С. 940.

¹¹ Нива. 1899. №42. С. 813. この広告では『全集 Полное собрание сочинений』と表記されているが、付録の本そのもののタイトルは『著作集 Сочинения』である。

¹² Нива. 1900. №44. С. 884.

¹³ Нива. 1901. №44. С. 684. レスコフ全集の完成は1903年。

そしてもう一つの理由は、それぞれの著作集が収録作品、テキストの正確さなど内容面で充実していたことである。

1899年の『ニーヴァ』43号に掲載された広告文には、翌年の付録『ゴーゴリ著作集』について次のように書かれていた。

「読者はわれわれのゴーゴリ作品集が正確さ、信頼性、充実度の点で際立っていることを、そしてわれわれの出版物がその特長においてゴーゴリの古典作家としての偉大な意義にふさわしいものであることを納得するに違いありません。¹」

この言葉どおり、付録の『ゴーゴリ著作集』は充実した内容であった。前述したとおり、これは完成度の高い『ゴーゴリ著作集』第10版をもとにして編集されたため、テキストは正確で収録点数も多かった。ゴーゴリの主要な文学作品は初期のものから戯曲、『死せる魂』第2部まで収められ、新たに発見された原稿や書簡の一部、ゴーゴリの評論も掲載された。そして各巻に編集者の注がつけられていた。

『ニーヴァ』の文学付録に対する読者の側の見方を示す例として、レーニンの1898年2月24日付けの家族宛ての手紙を挙げる。「[...] 子供の本はここでは役に立つでしょう。というのも、プロミンスキイの子供たちは読むものがないからです。私はこういうことをしようかとさえ思います。自分で『ニーヴァ』を購読するのです。プロミンスキイの子供にとってこれは非常に愉快的なものでしょう（毎週絵ですから）。私には、ツルゲーネフの全集、『ニーヴァ』が付録として約束しているあの12巻本です。これが送料込みで全部で7ルーブルなんですから！ツルゲーネフだけでもまあまあきちんと出版されているなら（つまり、歪曲や削除、汚い印刷などがないなら）購読に値します。家族で誰か去年の『ニーヴァ』の付録を見ませんでしたか？ 確かドストエフスキイだったと思うのですが？ そこそこの本でしたか？²」この文章は、『ニーヴァ』本誌よりも付録目当てに購読する読者の存在を裏付けている。また付録が読者をひきつけた最大の要因がその充実度だったことを示している。

『ニーヴァ』の付録は内容面で非常に完成度が高く、装丁や紙質の点では簡素だが正確に美しく印刷されていた。付録が充実しているあまり、本誌と付録の主従が逆転したと評されることさえあった。1904年に新聞『ルーシ』でフィンガルは、マルクスが無料付録のついた『ニーヴァ』の出版を止め、付録を出版しその無料付録として『ニーヴァ』を付け始めたと揶揄したという³。実際には『ニーヴァ』本誌も多彩な内容で読者を惹きつけ

¹ Нива. 1889. №43. С. 836.

² Ленин В. И. Полное собрание сочинений. М.: Политиздат, 1965. Т. 55. С. 80-81.

³ Фингалの本名は И. Н. Потапенко. Динерштейн А. Ф. Маркс и русские писатели. С. 127.

ていたが、フィンガルの発言は『ニーヴァ』の付録の量と内容の濃さが同時代人にとって驚異的であったことを伝えている。

独占的な出版

ここまで内容の充実した付録を発行できる出版者は稀だった。作家の死後 50 年が経過して著作権が切れた作品以外については、出版者は著作権の相続人に対して高額のコピー料を支払って出版権を買わなくてはならなかったからだ。サルティコフ＝シチェドリンの全著作の出版権は相場で 5 万ルーブルだった¹。マルクスはゴーゴリの出版権を持つドウムノフに 15 万ルーブル、1893 年にドストエフスキイの遺産相続人に 7 万 5 千ルーブルを支払って出版権を購入した²。また、ゴンチャロフの作品 3 つに対して 2750 ルーブル³、人気のなかったフェートの全著作に対して 3 万ルーブルを支払った⁴。

これだけの額を支払ってもマルクス社は赤字を出さなかった。ドストエフスキイの作品を付録につけた年に『ニーヴァ』は定期購読者を 5 万人増やし、25 万ルーブルの増収を達成した⁵。

『ニーヴァ』に文学の付録をつけた時点で作家たちの著作権がまだ切れていなかったことは、発行部数を増大させる重要な要因だった。作家の死後 50 年が経過した時点で作品は社会の財産となり、出版権を遺族から購入する必要がなくなるため出版費用は一挙に安くなる。その結果、資本の小さい会社を含む多くの出版社が作品を出版し始め、独占的な出版が不可能となり読者が分散する。

顕著な例がゴーゴリである。著作権が切れた 1902 年以降、一年間に 1136100 部のゴーゴリ作品本が出版され、ゴーゴリの関連本の総数は 200 万部に及んだ⁶。マルクスにとって 1902 年より前にゴーゴリ著作集を出版することは『ゴーゴリ著作集』と『ニーヴァ』の付録の売上を伸ばすための必須条件だった。出版権に巨費を投じたとしても、独占的に出版するほうが利潤は大きかったのである。

有名作家の著作に巨額を投資し、それを上回る利益をあげることで雑誌を拡大する。『ニーヴァ文学著作集』はこうした拡大再生産のサイクルの中で成立していた。これを実現させる要因としてマルクスの大きな資金力と企画を成功させる商才は必須だった。

¹ Там же. С. 144.

² Там же. С. 135.

³ Там же. С. 143.

⁴ Там же. С. 145.

⁵ Там же. С. 135.

⁶ Динерштейн. «Фабрикант» читателей А. Ф. Маркс. С. 110. ゴーゴリの場合は当時としては異例なほど著作権切れ後の発行部数が多かった。

3. 『ニーヴァ』盛衰の背景

読書事情

しかし『ニーヴァ』の付録による成功は出版者の能力だけで決まったわけではない。例えば19世紀半ばのロシアでは、読者が少なかったため『ニーヴァ』のような企画をたてる出版者は存在しなかった。また1910年代に入ると雑誌の読者の中心は『ニーヴァ』から後進の『ロージナ Родина』や『アガニョーク Огонек』に移っていく。『ニーヴァ』の付録の成功は19世紀末から20世紀初頭における多様な要因が重なったところに生じた現象だった。

要因は複数あるが、そのうちの一つとしてまず田舎における読書事情について考察する。1904年の『ニーヴァ』50号でスヴェトロフは田舎のインテリには本も読書の習慣もないことを指摘した後に、1890年ごろの地方の図書館の悪条件について記述している。

「読み物を得るためには、30-40 露里離れた町に赴いて図書館から何冊か本を借りてこなくてはならなかった。図書館は普通非常に本が少なく、最も人気のある本は常に借り出されていた。というのも大抵多くても2部しかおいていなかったからだ。本の大半は読みすぎてぼろぼろになり、ページが破れていて [中略] ロシアの優れた作家たちの作品の多くは、図書館から『排除』されていた。¹⁾

この頃に地方の図書館の数が少なかったことは、統計から裏付けられる。『ロシア帝国統計²⁾』には1887年の県・州ごとの図書館数が記されているので、この中から平均的な図書館数の県を選んで列挙しよう。例えばヴァトカの図書館は18、ノヴゴロドは14、リヤザンは12。ヨーロッパ・ロシア以外の地方になると、エニセイは7、ウラルは6、トウルガイが0と少ない。しかしペテルブルグとモスクワの図書館数は他県と比べて圧倒的に多く、ペテルブルグは59、モスクワは49もあった。この数字から、ペテルブルグ・モスクワと他の地方との間には読書事情の点で大きな較差があったことが窺える。

そこでペテルブルグ・モスクワと他県の読書事情の格差について、図書館の数だけでなく人口、識字率も含めより詳しく調べてみよう。以下では便宜上ペテルブルグとモスクワを中央、その他の地域を地方と呼ぶ。ここで用いる資料は

①1897年にロシア全国で行われた国勢調査³⁾

¹⁾ Нива. 1904. №50. С. 1014.

²⁾ Статистика Российской империи : Сборник сведений по России 1890. Спб.: ЦСК МВД, 1890. Т. 10. С. 254-255.

³⁾ Первая всеобщая перепись населения российской империи, 1897 г. Под ред. Тройничкаго Н. А. Спб.: ЦСК МВД, 1903-1905. Т. 1. Архангельская губерния. Т. 12. Область войска Донского. Т. 16. Киевская губерния. Т. 24. Московская губерния. Т. 37. С-Перетбургская губерния. Т. 40. Смоленская губерния. Т. 47. Херсонская губерния. Т. 72. Амурская область. Т. 87. Тургайская область. Т. 88. Уральская область.

②『ロシア帝国統計』¹の各種印刷所・図書館・書店数の統計（ヨーロッパ・ロシアは第40巻の1896年のデータ，その他の地域は第10巻の1887年のデータ）²の二つである。①で人口・識字率を，②で図書館と書店数を参照した。

表1

	総人口 (人)	識字率 (%)		識字人口 (人)
		全体	都市部	
ヨーロッパ・ロシア				
ペテルブルグ	1,264,920	62.6	63.9	791,839
モスクワ	2,430,581	40.2	55.7	977,093
ヘルソン	2,733,612	25.8	43.8	707,732
キエフ	3,559,229	18.1	45.8	644,220
スモレンスク	1,525,279	17.3	51.4	263,873
ドン	2,564,238	22.4	42.9	574,389
アルハンゲリスク	346,536	23.3	53.7	80,743
その他				
ウラル	645,121	12.3	38.2	77,414
トウルガイ	453,416	4.5	24.4	29,835
アムール	120,306	24.8	39.5	20,403

まず表1では，資料①をもとに各県・州の人口と識字率，識字人口をまとめた³。

ヨーロッパ・ロシアの内部では，各都市部の識字率にあまり差がない。しかし県単位で見ると中央と他県の差は大きい。一方，ヨーロッパ・ロシア以外の地域では都市部の識字率がヨーロッパ・ロシアに比べて低い。県単位の識字率にはばらつきが見られ，トウルガイは特に低い。

次の表2では，表1にある識字人口と資料②の書店・図書館数の統計を用いて

A. 図書館一軒あたりの識字人口（識字人口÷図書館数）

B. 書店・図書館一軒あたりの識字人口 { 識字人口 ÷ (図書館数 + 書店数) }

を算出した。

¹ «Статистика Российской империи» は全95巻。そのうち印刷所・書店・図書館数の統計は第1巻（1887年発行，統計実施は1884-85年），第10巻（1890年発行，1886-87年実施），40巻（1897年発行，1896年実施）に掲載。

² ヨーロッパロシア以外の地域の図書館・書店数の統計を掲載しているのは第10巻のみ。

³ 識字人口は総人口と識字率から筆者が算出した。統計資料の識字率はロシア語の読み書き能力と見られる。

表 2

	識字人口	書店	図書館	合計	A	B
ヨーロッパ・ロシア						
ペテルブルグ	791,839	320	54	374	14,664	2,117
モスクワ	977,093	228	50	278	19,542	3,515
ヘルソン	707,732	80	26	106	27,220	6,677
キエフ	644,220	48	19	67	33,906	9,615
スモレンスク	263,873	22	25	47	10,555	5,614
ドン	574,389	32	11	43	52,217	13,358
アルハンゲリスク	80,743	9	2	11	40,372	7,340
その他						
ウラル	77,414	1	6	7	12,902	11,059
トウルガイ	29,835	—	—	—	—	—
アムール	20,403	—	—	—	—	—

A の値は一つの図書館を利用する識字者の平均人数を表している。A の値が大きいほど、一つの図書館の利用者は多い。逆に言えば、A の値が大きいほどそれに反比例して、識字人口に対する図書館の割合が低くなる。スモレンスクを除くヨーロッパ・ロシアの各県の図書館は、単に数が少ないばかりでなく識字人口に対する割合も低いことが項目 A からわかる。またこの結果は、先に引用したスヴェトロフの記述を裏付けている。

更に踏み込んでロシアの各県でどれほど書籍が入手しやすかったかを調べたのが項目 B である。書店と図書館は運営の方法や目的で大きく異なるが、本を提供するという役割では共通している。そこで識字人口を書店と図書館の数の和で割り、一つの書店ないし図書館の利用者の平均人数を出した。これも A と同様、B の値が大きいほどそれに反比例して、識字人口に対する図書館・書店の割合が低くなる。

具体的に数値を見ると、書店・図書館数がヨーロッパ・ロシア 50 県の中で第 9 位¹であるキエフでさえ、一つの書店ないし図書館の利用者はペテルブルグの 4.5 倍もいる。ヘルソンも多く、ペテルブルグの 3 倍の利用者がいる。人々が本を入手できる施設がどれだけあったかという点から計算した B は A 以上に忠実に実態を反映していると考えられる。その B から見た地域格差は A よりも大きい。

¹ Статистика Российской империи : Сборник сведений по России, 1896. Спб.: ЦСК МВД, 1897. Т. 40. С. 358.

ヨーロッパ・ロシア以外の地域になると、図書館数と書店数は更に少なくなる。トウルガイやアムールについては、値が表記されないことに関して統計資料の中で註が付されていないことから、数値が不明なのではなく一般に開放されている図書館・書店数が0なのだと考えられる。トウルガイでは読み書きのできる人間が3万人近くいたにも関わらず、書店や図書館がないことから、本の入手が困難だったことが推察される。

表1, 2から以下の二点が明らかとなる。まずヨーロッパ・ロシアにおいて中央と地方の間には識字率に大きな格差があったということである。これは教育格差が大きかったことを示している。第二に、教育格差以上に書店や図書館の数の差が大きかったということである。読み書きはできても本が不足している状態が地方では常に続いていたのである。ヨーロッパ・ロシア以外の地域では、本不足はより深刻だった。

こうした読書事情の地域格差と『ニーヴァ』の地域ごとの購読部数には関連が見られるのだろうか。これを考察するための糸口として『ニーヴァ』の地域ごとの購読部数を見ていきたい。以下の文章は、1904年の『ニーヴァ』50号に掲載されたエイゼンの記事からの引用である。

「特に『ニーヴァ』の購読者が多いのはペテルブルグ県で、38,965部、モスクワ県はその半分、かなり多くの数の購読者がいるのはヘルソン県（オデッサ含む）で、11,408部。キエフ県は8,840部、ドン州とエカテリノスラフ県はそれぞれ6,000部以上。カフカスで一番少ないのはカルス州で806部、トウルガイ州は119部。¹」

同じ記事によれば、1904年度の『ニーヴァ』の全購読者は25万人である。そのうち約6万人がペテルブルグとモスクワだとすると残りの19万人は他の地域の購読者である。ペテルブルグの出版社の発行する雑誌が19万部も地方で読まれていたことは当時の出版産業では異例だった。『ニーヴァ』の成功を支えたのは地方の購読者だったと言っても過言ではない。

このことは、地方の不十分な読書状況と関連があるのではないだろうか。毎週郵送で配達される『ニーヴァ』は、地方の人々にとって貴重な読本だったはずである。『ニーヴァ』が彼らの読書全般の中で大きな比重を占めていた可能性は十分ある。

これを確かめるため、各県における書店・図書館の数と『ニーヴァ』の購読者数の間の関連を調べたい。ヨーロッパ・ロシアの50県における²各種印刷所・書店・図書館の数を『ロシア帝国統計』（1897年発行）³から、購読者数をエイゼンの記事から取り、表3にま

¹ Нива. 1904. №50. С. 1011.

² エイゼンがカルス州とトウルガイ州を部数が少ない地域として挙げていること、またトウルガイの図書館数が不明あるいは0であることから、表3はヨーロッパ・ロシアに限定した。

³ Статистика Российской империи. Т. 40. С. 358.

とめた。またCは 図書館や書店一軒に対する『ニーヴァ』の購読部数{ニーヴァの部数÷(図書館数+書店数)}である。ただしエイゼンのデータは1900年前後の数値であるのに対し、統計は1894年と時期に開きがあるためここでは概要を提示するにとどめる。

表3

	書店	図書館	合計	C
ペテルブルグ	320	54	374	104.18
モスクワ	228	50	278	69.78
ヘルソン	80	26	106	107.62
キエフ	48	19	67	131.94
ドン	32	11	43	139.53
エカテリノスラフ	22	18	40	150.00

ペテルブルグは書店・図書館数が国内一だが『ニーヴァ』の比重も低くはない。これはペテルブルグがマルクス出版社の地元であることや、送料が安い分他の地域よりも『ニーヴァ』が安価だったこと、そして識字率が高いことが要因であろう。それに対しモスクワは『ニーヴァ』の比重が低い。ヘルソンはヨーロッパ・ロシア50県のうち5番目に書店・図書館が多いためか、『ニーヴァ』の比重はペテルブルグとほぼ同じ高さである。しかし残りのキエフ、ドン、エカテリノスラフは他の3県に比べ『ニーヴァ』の比重が高い。また書店・図書館数が少なくなるほど『ニーヴァ』の比重は高くなっている。以上のことから地方の住民の読書における『ニーヴァ』の比重はペテルブルグやモスクワに比べて大きかった可能性が高い。

郵便の発達

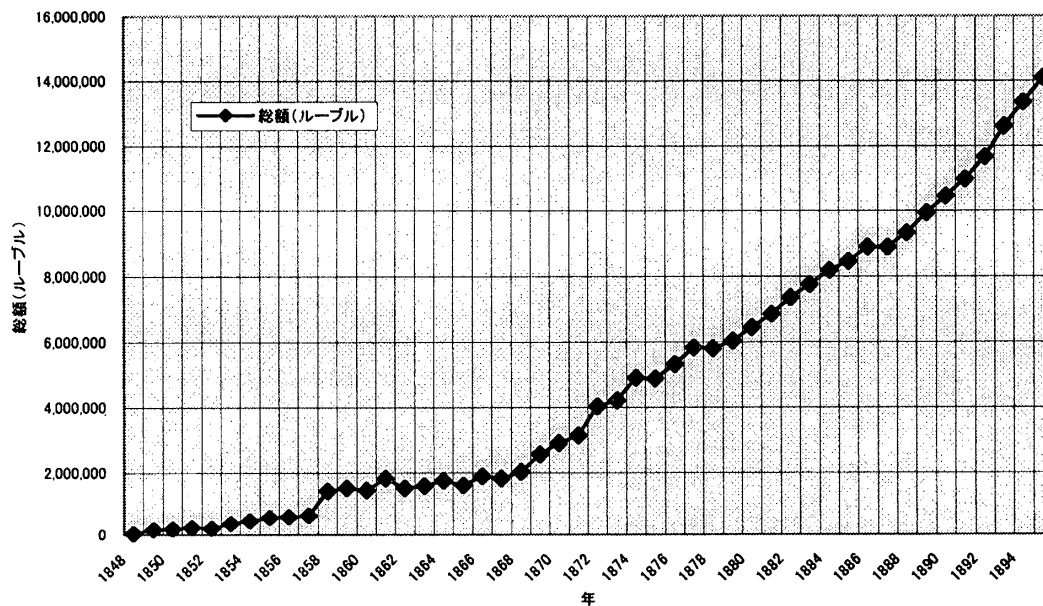
郵便事情も、地方における『ニーヴァ』の発行部数を上げる大きな要因だった。図1は郵便制度の発足した1848年から1895年までの、ロシア全国の郵便事業における郵便料金の総額の推移を表したグラフである。ここで算出されているのは切手、送料の含まれた封筒、葉書や封書などの郵使用紙、手形の料金である¹。

横軸一目盛りが一年である。『ニーヴァ』の創刊された1869年から1895年にかけての伸びは大きく、1869年の2,558,830ルーブルから、1895年には14,095,442ルーブルと約五倍に増加している²。

¹ Статистика Российской империи. Т. 40. С. 249.の統計をもとに筆者がグラフを作成した。

² 1872年に葉書、1890年に手紙と帯封の販売が始まった。特に葉書の販売数が多かった。Статистика Российской империи. Т. 40. С. 249.参照。

図 1



ロシア全国の郵便の配達経路も拡大した。1888年から1895年までの、フィンランドをのぞくロシア帝国内の郵便経路の距離、および前年より拡張した距離が表4である¹。郵便経路に含まれるのは鉄道・舗装道路・無舗装道路・田舎道・海・湖・川の7種類である。

表 4

年	距離(露里)	前年からの拡張距離(露里) ²
1888年	175,861	
1889年	180,593	4,732
1890年	182,862	2,299
1891年	186,577	3,715
1892年	187,406	829
1893年	188,968	1,562
1894年	192,235	3,267
1895年	198,688	6,453

各種の経路の中でもっとも拡張したのは鉄道で、1888年の26,975露里から1895年には35,320露里に延びた。一方、舗装道路の長さはそれほど大きな変化がない。無舗装道路は

¹ Статистика Российской империи. Т. 40. С. 236-237.

² 郵便経路から筆者が計算した。

むしろ減少した¹。ここから道路経由で運ばれていた郵便が鉄道の拡張に伴い、鉄道経由に移行したことが推測される。一方、田舎道は1888年の22,210露里から1895年には30,368露里に拡張した²。ここから、鉄道や舗装道路が通っている地方の都市からそれまで郵便経路の無かった田舎に郵便網が拡大したことが考えられる。

郵便網の発達や読書事情の悪さなど、地方の『ニーヴァ』購読者の増加を促す条件はそろっていた。一方マルクス社の側も地方の住人が購読しやすいように『ニーヴァ』の購読料を設定していたようである。『ニーヴァ』の地域別の年間定期購読料の広告から料金表を引用する。

『ニーヴァ文学著作集』『月刊文学付録』込みで

ペテルブルグ、配達料なし	5ルーブル 50コペイカ
モスクワ、配達料なし、ペトロフスキ通りのM. ペチコフスカヤの出張所	6ルーブル 25コペイカ
オデッサの出張所「教育」店	6ルーブル 50コペイカ
ペテルブルグ、配達料込み	6ルーブル 50コペイカ
ロシア全国、配達料込み	7ルーブル
外国	10ルーブル」 ³

『ニーヴァ』の購読料は配送料が含まれるため地域ごとに異なっていた。この広告にある配達料とは、印刷所のあるペテルブルグから地方の郵便局までの送料をさしていると考えられる。ただしモスクワやオデッサに住む購読者がマルクス社の出張所まで出向いて受け取る場合には、最寄の郵便局への配送よりも安くなる。当時のロシアにおける郵便料金の体系が不明なので詳しいことは言えないが、配送料についても考察を加えておきたい。

マルクス社が設定した配送料を、オデッサとペテルブルグについて比較する。(以下、ルーブルを p., コペイカを k. と表記する。) 下記の a, b, c は筆者が料金表から地域ごとの配送料の内訳を計算したものである。

- a. ペテルブルグ——1p. →ペテルブルグ購読者
 [5p.50k.] 県内 [6p.50k.]
- b. ペテルブルグ——1p. →オデッサ出張所——50k. →オデッサ購読者
 [5p.50k.] 県外 [6p.50k.] 県内 [7p. (ロシア全国と同じ)]
- c. ペテルブルグ——1p.50k. →ロシア全国購読者
 [5p.50k.] 県外 [7p.]

¹ Статистика Российской империи. Т. 40. С. 236-237.

² Там же. С. 236-237.

³ Нива. 1889. №52. С. 1023.

県内の配達料金を比較すると、上記 a のペテルブルグ 1p. に比べて b のオデッサは 50k. と安く設定されている。また県外の配達料金は b のペテルブルグ・オデッサ間の配達料が 1p. であるのに対し、c のロシア全国への配達料は一律 1p.50k. である。ヨーロッパ・ロシア以外の地域へも『ニーヴァ』が配達されたことを考慮すると、ロシア全国への配送料金はオデッサ以上に割安である。『ニーヴァ』の定期購読料は、雑誌の価格に単純に郵便料金を上乗せしたものではなく、ペテルブルグからより遠い地方の読者ほど割安に購読できるように設定されていたと考えられる。

先ほど述べたように、1880 - 90 年代にペテルブルグ・モスクワの中央と地方の間には読書事情の点で大きな格差があった。一方で同じ時期に郵便が発達し、郵便網が拡大してそれまで郵便の届かなかった地域にも配達が可能となった。こうした状況にあわせてマルクスは文学作品の付録をつけて『ニーヴァ』を配達するという出版形態を考案し、成功を収めた。本屋や図書館が数・内容ともに貧弱だった地域の住民にとって、比較的安価に郵便で届く『ニーヴァ』の読本に大きな魅力があったのは想像に難くない。

大衆読者の登場

しかし 1910 年代に入ると『ニーヴァ』は市場での勢力を失い¹、1916 年にスイチンに売却されてしまう。『ニーヴァ』が 20 世紀になぜ勢力を失ったのかを、同じイラストつき週刊誌の『ロージナ』や 1908 年創刊の『アガニョーク』との比較および初等教育の普及率の調査を通じて考察したい。

『ロージナ』は文学作品の付録をつけるなど、出版形態の点で『ニーヴァ』とよく似た週刊誌である。しかし『ロージナ』の読者層は『ニーヴァ』よりも幅広く、中等教育を受けた人々から文盲の公衆までが対象だった。難しい作品は避け、ルポーク風なイラストを掲載するほか、内容は大衆文学、子供向けのお話、時事問題の要約など多岐にわたった²。

『アガニョーク』は『ニーヴァ』の 3 分の 1 以下の値段で販売され、1910 年に 15 万、1912 年に 30 万、1914 年に 70 万部という抜群の発行部数を記録した³。時事的な話題やニュースに重点を置き、内容は犯罪、冒険、ロマンス、スポーツニュースなどが多く、写真やイラストが誌面を埋め、センセーショナリズムに徹した雑誌作りであった⁴。

¹ Jeffrey Brooks, *When Russia learned to read. Literacy and popular Literature, 1861-1917* (Princeton: Princeton University Press, 1985), p. 113.

² Ibid., p. 114.

³ Ibid., p. 115.

⁴ Ibid., p. 115.

マルクス社は宣伝ポスターで博覧会のロシア技術協会の金メダルを授与されるほど宣伝活動に力を入れていた¹。しかし定期購読方式で販売される雑誌は減り、街のニューススタンドや小さな書店で気ままに本を買う読者を対象にした出版物が増えた²。このときロシアにおいて最も勢力のあった読者グループは『アガニョーク』や日刊紙の読者であり、定期購読で送られてくる古典文学作品や有名画家の複製画に魅了される読者は中心ではなくなっていた。

これらのことから『ニーヴァ』の衰退した背景には大衆読者の増加という変化があったことが推察できる。これを教育の面から調べてみたい。1874年から1883年におけるヨーロッパ・ロシアの各県の教育機関・生徒数の増加率の統計³を元に、50県の総計とペテルブルグの数値をまとめたのが表5である。

パーセントで見るとペテルブルグにおける初等教育と中等教育機関の増加率はほぼ同じである。しかし数で見ると、1883年に初等教育機関が1171校⁴、中等教育機関が男子校・女子校合わせて53校あった⁵ことから、初等教育機関の増加が目覚しかったことがわかる。50県全体においても初等教育機関の増加は顕著である。また、50県・ペテルブルグともに初等教育の女子生徒の増加率が大きかった。

表 5

	学校数	男子生徒	女子生徒
50 県			
初等教育	19.54%	42.06%	78.70%
中等教育	12.76%	32.64%	48.84%
ペテルブルグ			
初等教育	15.53%	60.03%	95.56%
中等教育	16.46%	35.56%	17.90%

これを1897年に行われた国勢調査のペテルブルグ版と照らし合わせてみる。国勢調査では貴族、聖職者、市民や商人など町の住人、農民やコザックなど農村の住人の4階層別に各世代の識字率の調査が行われた。

¹ Бархатова Е. В., Школьный Н. Н. Русский издательский плакат 1860-1930 : Каталог выставки. Спб.: Российская национальная библиотека, 1996. С. 4.

² こうした小さな書店の増加については Brooks, *When Russia learned to read*, p. 110. に詳しい。

³ Статистический временник Российской империи : Сборник сведений по России за 1883 год. Спб.: ЦСК МВД, 1886. Сер. 3. Вып. 8. С. 112-113.

⁴ Там же. С. 98-99.

⁵ Там же. С. 92-93.

貴族を含むすべての階層で10代以降識字率が大きく上がることから、大抵10代で読み書き能力を身に付けたと考えられる。そこで以下では12歳という年齢を基準に考察を進めることにする。表5の統計の対象年である1874年と1883年にそれぞれ12歳だった子供は、国勢調査が行われた1897年には35歳と26歳になっている。つまり1897年の35歳は初等教育機関の増加前の世代であり、26歳は増加後の世代である。

これを踏まえて、表6を見てみよう。表6は国勢調査の識字人口と非識字人口からペテルブルグ全体に住む農民男女とペテルブルグ郊外の地区ペテルゴフに住む農民男女の識字率を計算したものである。

表6

	ペテルブルグ	ペテルゴフ
40代	45.64%	42.39%
30代	54.64%	48.91%
20代	63.60%	57.03%
10代	79.67%	77.70%

30代より20代が10%程度増加しており、表5と大体一致していることがわかる。また10代の識字率が更に上がっていることから、83年以後も教育機関は増加し続けたことが窺える¹。この10代以下の人々が、ニーヴァの衰退する1910年代に購買力のある読者層の中心となる。

また女性の識字率を見ると、30代が28.82%、20代が41.85%、10代は67.69%である²。男女合わせたときよりも女性の識字率の上がり幅が大きいことから1874-1883年の統計結果との関連が見られる。

ペテルブルグ市内でも郊外でも、1897年には多くの農民が初等教育を受けることができるようになった。彼らが10数年後にペテルブルグの大衆的な出版物の読者層を形成した可能性は高い。

『ニーヴァ』の読者層は、主に中等教育まで受け、古典文学を読むことに魅力を感じる程度に読書の習慣のある人々であった。1910年代の新たな読者たちは、こうした人々とは異なる読み物を求め、『ニーヴァ』はすでに古い雑誌となってしまった。『ニーヴァ』は1870年代から1890年代の社会的な諸条件のなかにあったからこそ成功した雑誌であった。

¹ Первая всеобщая перепись населения Российской империи, 1897 г. Т. 37. С. 22-23.

² Там же. С. 22-23. 識字率の値はすべてこの資料をもとに筆者が計算した。

4. 古典作品の読者たち

付録の完成度

こうした時代背景を踏まえたところで改めて『ニーヴァ』文学付録について考察する。

先述したとおりこの付録は『ニーヴァ』の成長を決定付けた目玉商品だった。このことは発行部数の増加から明らかである。だが発行部数の増加は成長という出来事の一局面に過ぎない。『ニーヴァ』の付録の内容に着目すれば『ニーヴァ』の成長を支えたマルクスの出版方針や出版者としての使命感が見えてくる。また付録が広まった結果、人々の読書の仕方に何らかの波及があったことも『ニーヴァ』成長の重要な側面である。

マルクスはどのような出版方針で付録を作ったのだろうか。付録のもたらした影響とは何だったのか。以下ではこうした問題を付録の内容や『ニーヴァ』の広告をもとに考察する。

付録の内容

まず付録の内容について詳しく見ていこう。1900年の『ニーヴァ』の付録『ゴーゴリ著作集』は、チホンラボフとシェンロクが編集した『ゴーゴリ著作集』第10, 11版を元にしたものである。このうちの第11版の序文で、チホンラボフはマルクス版以前のゴーゴリ著作集と比較しながら第10, 11版の特徴を解説している。

チホンラボフによれば1883年までに出版された『ゴーゴリ著作集』、すなわち第9版以前の版には重大な欠点があった。「オリジナルの原稿と常に検討できたわけではないために校正がぞんざいになされ、[中略] ゴーゴリのテキストの損傷は、時として一行丸ごと抜かされてしまったり、作家の個々の表現が恣意的にほかの表現に変えられることさえあった。¹⁾

従来の『ゴーゴリ著作集』のこうした欠点を克服するために、チホンラボフは第11版を編集する際「1.作品収集の徹底 2.印刷されるテキストの正確さ²⁾」の実現を目指した。これは以下の3点によって達成された。「1.チジョフの版で印刷されず、第10版に掲載されたいくつかの作品を第11版に収録した。[中略] 2.第11版では、『ゴーゴリ著作集』第10版でわれわれが出版した断片、草稿、未完の作品のテキストを収録した。[中略] 3.第11版にはゴーゴリの生前に出版された作品を最終稿の形で掲載した。³⁾

¹⁾ Гоголь, Н. В. Сочинения Н. В. Гоголя : В 12 т. Под ред. Тихонравова Н. С. 16-е изд. Спб.: А. Ф. Маркса, 1901. Т. 1. С. 7. この第16版には、第11版にチホンラボフがつけた序が掲載された。

²⁾ Там же. С. 7.

³⁾ Там же. С. 7-8.

その結果第 10, 11 版にはゴーゴリ作品のほとんどが掲載された¹。テキストはゴーゴリの自筆原稿と照合しながら校正した正確なものだった。さらに、ゴーゴリの推敲の結果生まれた複数のバリエーションも載った。

付録『ゴーゴリ著作集』に実際に収録された作品と資料の全内容は、1899 年の『ニーヴァ』43 号の巻末にある 1900 年の定期購読の広告で紹介されている。この広告をもとに、付録『ゴーゴリ著作集』全 12 巻の内容の充実度と特徴を見ていきたい。

まず全 12 巻中 7 巻には、書簡を含む主要な作品が収録された。第一巻にはゴーゴリの肖像画、チホンラボフの序言とシェンロクの前書き、シェンロクによるゴーゴリの伝記、『ジカニカ近郊夜話』の初版につけられたゴーゴリの序文、『ジカニカ近郊夜話』第一部・第二部が収められている。

第 2 巻は『ミルゴロド』全編と作品にでてくる小ロシアの言葉の説明。第 3 巻は『鼻』『肖像画』『外套』『四輪馬車』『ローマ』と『検察官』。第 5 巻は『チチコフの遍歴、あるいは死せる魂』第一部。第 7 巻と 8 巻は『友人たちとの往復書簡抄』。第 9 巻は青年時代の習作や『ガンツ・キューヘリガルテン』、初期作品の断片と『アラベスキ』第一部。第 10 巻は『アラベスキ』第二部が収録されている²。

以上の巻には註やゴーゴリの古い肖像画なども入っているが、それほど特別な印象は受けない。しかし第 4 巻は違う。

「第 4 巻。ゴーゴリ直筆の 3 枚の絵と『検察官』の最終幕の直筆スケッチの複製写真。喜劇『検察官』への前書き。『検察官』初演の直後にゴーゴリがある文学者に書いた書簡の一部。初版に従って活字を組んだ 2 つの場面。『検察官』の本に収録されなかった場面。喜劇出版のために作家によって手直しされた『検察官』第一版の場面（1842 年）。『検察官』の第二版のためにかかれた場面（1844 年）。第 3 版の変更箇所。『検察官』を貧しい人々のために出版するつもりであることを述べた予告。『検察官』の結末。『結婚』。戯曲断片。『賭博者』。『実務家の朝』。『民事訴訟』。『下男部屋』断片。『新しい喜劇上演後の跳ね』。編者註。³」

これらは直筆のスケッチや初版の復元、『検察官』のバリエーションや出版予告など、読書の対象というよりは専門家が使う資料が収録されている。

また第 6 巻は「『死せる魂』第一部の付録資料：『死せる魂』第一部第二版の前書き。第一部に関する覚書。改変後の第 4 章の結末。コペイキン大尉に関する物語：A.最初のテキ

¹ 第 10, 11 版のなかでは書簡が一部発表されたのみ不完全だった。完全な書簡集は 1901 年にマルクス社から 4 巻本で出版された。Динерштейн. «Фабрикант» читателей А. Ф. Маркс. С. 110.

² Нива. 1899. №43. С. 837.

³ Там же. С. 837.

スト。B.検閲で削除されたテキスト。『チチコフの遍歴、あるいは死せる魂』第二部(未校正版)。編集者註。¹』という内容である。これもゴーゴリの覚書やバリエント、検閲で削除されたテキストなど、娯楽目的では読まれない資料である。

第11巻は『ゴーゴリ著作集』第一版に掲載されなかった以下の著作が掲載された。『中世に関する講義の構想』、『中世文献目録』、『アルフレッド(イギリス史の悲劇)』、『古代史への導入』、『タラス・ブーリバ(1835年の『ミルゴロド』に掲載された版)』、『1836年のペテルブルグ雑記』、プーシキンの『同時代人』に発表された評論²その他である。

第12巻には作家の死後出版された40年代後半に係る著作が掲載された。文学の教科書、『死せる魂』第一部が出版されるにあたり作家自身が手直したページ、『死せる魂』第二部で新たに見つかったページ、『死せる魂』第一部の登場人物のいくつかに関する作家の考察その他である。

この付録はマルクス社発行のゴーゴリ著作集の中でも最も完全な部類に属していた。1899年の『ニーヴァ』42号の広告は付録を以下のように宣伝している。「1900年の『ニーヴァ』の付録につく無料の付録として予定しているゴーゴリの作品集は、12巻に編纂されテキストの充実度と正確さの点でロシア文学におけるゴーゴリの意義の偉大さと完全に合致するものです。あらゆる点で、この作品集は最新の第14版をはるかにしのぐものです。³」

しかしこれが雑誌の無料付録であることを思い起こすとき、この充実度はいささか奇異に思われる。客寄せのための目玉であれば、主要な作品を掲載するだけで十分ではないだろうか。マルクス社による付録の完成度の追求を見たとき、我々は客寄せとは別の目的があることに気づかされるのである。

出版者の使命

では、別の目的とは何だったのか。これを考える手がかりとなるのは付録と一緒に発行された『ニーヴァ』本誌である。

そこでまず本誌の傾向を見ていきたい。『ニーヴァ』は「文学・政治・同時代生活のイラスト雑誌⁴」というサブタイトルどおり文学作品を中心としながらも首都のイベントや政治関連の簡単な記事を載せた雑誌である。それ以外にも安易に興味を引く科学や珍獣に関する記事、パズルやチェスのクイズが載った。ページごとに大きなイラストがつき、活字の比重は低く、全体に娯楽目的の紙面作りであった。

¹ Там же. С. 837.

² Там же. С. 837.

³ Нива. 1899. №42. С. 813.

⁴ Нива. 1904. №51. С. 1021.

だが、一つ一つ見るとイラストは保守的な題材を古典的なスタイルで描いたものが大半である。文学作品の挿絵や名士の肖像画、イベント会場の写真などが多く、人物画やカットはモダンな流行を取り入れつつも古典的な美学の枠を出ない。記事の内容も、スキャンダルや煽情的なものではなく、名士の紹介や文学関連の記念式典の模様などが選択された。家庭向けの雑誌というコンセプトにふさわしく『ニーヴァ』は年齢・性別の異なる読者の読書に耐える保守的な文学雑誌であった。

雑誌の傾向や水準の評価は、常に相対的である。確かに高等教育を受けた一部の知識人にとっては、『ニーヴァ』は下手な絵をちりばめた、水準の低いイラスト雑誌でしかないだろう。同時代人の証言によればマルクスは商才に長けていた一方、生涯ロシア語に通曉することはなく、文学の真の価値も理解していなかったと言われる。同時代におけるマルクス像は「読者の製造者」というあだ名が示すとおり利益優先の出版者というものであり、このイメージの延長で雑誌『ニーヴァ』の傾向も評価される。

だが『ニーヴァ』に対する見解で今日まで残っているものは知識人の言葉が多いため、われわれが『ニーヴァ』を評価するときにも彼らに近い目線をとりがちになることには注意すべきである。『ニーヴァ』読者たち自身は、知識人とは違う目で『ニーヴァ』を見ていたはずである。『ニーヴァ』の読者は読書が自由にできる環境にはなく、本を思うさま買う経済力もないが、中等教育を受け、知的好奇心に目覚めた人々だった。『ニーヴァ』は文学や科学の知識を手軽に提供し、絵や文学の豊富な付録がつき、しかも安かった。『ニーヴァ』読者の間にも教育水準や経済力に幅はあったが、彼らにとって『ニーヴァ』は決して下らないものではなかった。

マルクスは、他誌との厳しい競争の中で付録を増やすなどの工夫をしたが、本誌の編集方針をより大衆的なものに変えることはしなかった。そして常に、出版者には啓蒙活動をする義務があるという使命感を持ち、利益よりもロシアの文化への貢献を優先していることをアピールした。

「そう、マルクスは作家と作家の本を社会の財産とし、人々に愛されるものとし、ロシアにおいてロシアの作家を解放したばかりではなく民主化したのである。[中略]彼は、ナロードの啓蒙という畑に種をまく人であった。彼はこの大きな事業には資金も労力も惜しまなかった。[中略]いまや彼によってかたく組織立てられた民衆文学の光による大衆啓蒙の事業はしっかりと確立し、これを揺るがせるのは困難である。¹」

1904年の『ニーヴァ』50号でこう書かれているのは、単にこれがマルクスの追悼号であるからではなかった。マルクスが『ニーヴァ』とその付録の出版を通じて実現しようと

¹ Нива. 1904. №50. С. 1015.

していたのは、経済的利益と並んで、知的好奇心の芽生えた読者に知識と文化を広めることであった。

読書スタイルの提案

マルクスの出版者としての使命感を踏まえた上で、『ニーヴァ』の付録『ゴーゴリ著作集』の広告文を読みたい。

1899年の『ニーヴァ』43号の広告欄で、マルクス社は1900年の付録としてゴーゴリを選んだ理由の一つに作品の「一流の芸術的な美点、作品が絶え間なく掻きたてる興味¹」を掲げている。祖国の優れた芸術を民衆に開くことを出版方針の一つとする『ニーヴァ』にとってこれは当然のことといえるだろう。

それに加えてこの広告文では人々がゴーゴリを知ることの意義が強調された。

「ゴーゴリを知らないということはロシア文学の栄光と誇りを知らないということです。ゴーゴリを知らないということはロシア文学の華やかな開花の源と理由がわからないままであることを意味し、世界文学の最も優れた作品群の一つを省みないことを意味します。²」

この文章の前提には、『ニーヴァ』読者はゴーゴリを満足に読んでいないという認識があった。この認識は、前述した統計の分析で明らかになった読書状況と関連している。1870-90年代には学校教育によって文学作品を読む能力を備えた読者が増加する一方、図書館や書店は少なく、読書環境は整備されていなかった。しかし、彼らが古典に触れる機会がなかったわけではない。少ないながらも図書館はあり、書店では作品集や海賊版が売られていた。人々が乏しい本や不正確なテキストを通じて作品を読み、ゴーゴリという古典作家に興味を抱いていた可能性は大きい。

広告の続きの文章はそれを裏付けている。「ゴーゴリの作品が〔中略〕大きな教育的意義をもっていることは誰もが認めることです。ゴーゴリは学校においてゆるぎない位置を得ています。どんな学校も家庭も、プーシキンと同様、ゴーゴリなしにはすまないのです。しかしゴーゴリ作品は高価なためにまだあまり広まっていません。これらすべての理由により、われわれは来年の『ニーヴァ』の付録としてゴーゴリの作品を読者に提供します。」

ゴーゴリ作品の意義は誰もが認めるが、本は手に入りにくい。『ニーヴァ』はこうした読書状況を打開するために、無料でゴーゴリ作品を提供するのである。広告文はゴーゴリ作品の教育的意義に触れ、読書の場として学校と家庭を挙げている。実際には『ニーヴァ』

¹ Нива. 1899. №43. С. 836.

² Там же. С. 836.

は家庭向けの雑誌で世帯単位の購読が多かったので、『ニーヴァ』が意図している付録の提供先として事実上、重点がおかれているのは家庭である。

古典文学全集が月刊付録で送られてくることもさることながら、自宅に立派な全集を所有して読むという読書形態は当時非常に新しかった¹。雑誌の付録として毎月1巻ずつ古典文学全集を購読者の家に届けるという方式を『ニーヴァ』が採用する以前には古典を自宅に揃える読み方は特権階級にのみ許された贅沢だった。

『ニーヴァ』が文学付録を始める前に、『ニーヴァ』を読む階層の読者がそうした読み方を明確な形で望んでいたとは考えにくい。階層間の習慣の違いが大きい上に、読者それぞれの読書の方法や作品の好みにはまとまりがないからだ。しかし半端な形での読書は、却って人々の古典への欲望を刺激し増大させていた。現に古典に対する需要が1880-90年代に増大していたことはこうした読者の欲望の一端を表していると考えられる。

『ニーヴァ』はこうした集団に対して、送られてきた古典文学全集を自宅で受け取り、所有するという古典との関わり方そのものを提示した。この付録に10万人以上の人々が応じた結果が『ニーヴァ』の発行部数の増加であった。『ニーヴァ』は集団の読書に対する欲望に定期購読と所有という方向性を与え、大規模に規格化したのである。マルクス社は、こうした読書形態を通じてゴゴリの「教育的意義」を人々の間に広めようとした。

では、ここで言う「教育的意義」とは具体的に何をさしていたのだろうか。同じ広告文にある以下の文章がこれを考える手がかりとなる。

「ゴゴリを知らないということは、[中略] ロシアの生活について、その不完全さと豊かな力を含め熟考することを望まないことを意味します。というのも、ゴゴリ自身とゴゴリのロシアの生活に対する関係がこのような力の一つを成していることは明らかだからです。[中略] この不滅の作品すべてがロシアの魂のもっとも完全な発露の一つとなっています。ゴゴリを知らずして、ロシアのナロードの魂を知ることは不可能なのです。²」

ここではゴゴリの作品が単にロシアの生活やロシアの魂を題材にしているだけでなくその発露として語られている。ゴゴリ作品を読むことの意味は、単に教科書や読本として読むことにあるのではなく、ロシアの魂やナロードの魂について人々が多くを知ることによって求められているのである。

¹ ゴゴリ作品の出版物は1880年代でもすべて合わせて1万部以下、マルクス社の『ゴゴリ著作集』第10版以前に出された4巻本は3千部程度しか売れなかった。Динерштейн. «Фабрикант» читателей А. Ф. Маркс. С. 102.

² Нива. 1899. №43. С. 836.

このあと広告はこう述べる。「われわれの目的が達成されるのは、われわれが読者にゴーゴリの作品を完全な形で提供したときだけである。¹」これがなぜなのかは、広告には書かれていない。

付録の目的が、単に主要なゴーゴリ作品を読者に読ませることではないことは、過剰ともいえる充実度から明らかである。だがマルクスがゴーゴリの書いた書評や作品のバリエーション、検閲で削除された箇所まで読むことを22万人もの読者に対して期待していたとは考えにくい。『ニーヴァ』が読者に新しい古典の読み方を提示したことを考え合わせると、マルクスは読者が詳細に著作集を読むことよりも、むしろ、読者が著作集を所有しいつでも読める状態をつくることに重点をおいていたのではないだろうか。

このように考えると、『ゴーゴリ著作集』の存在意義はいつでも好奇心や知的欲求を満たし、ロシアの文学やナロードの生活や魂と言われるものについて教えてくれる事典のような役割に収斂する。大勢の人々がロシアの文学や生活に関するイメージや知識を構築すること、そしてそのもととなるにふさわしい文化遺産として人々に所有されることに『ゴーゴリ著作集』の意味があった。実際にマルクス社発行のゴーゴリ著作集は、バリエーションの集大成、歴史的・文学的視点からの豊富な註という特徴から、ゴーゴリの百科事典と呼ばれた²。この付録はすべてが読まれないとしても、事典のようにゴーゴリの世界を包括的に体現する完全なものでなくてはならなかったのである。

5. 伝統の創造

マルクス社の『ゴーゴリ著作集』出版物の特徴を同時代の文脈で考察してきたが、この出版物をゴーゴリの作品出版史の中に置きなおしたときその特徴はより明確になる。

ゴーゴリの作品は、ゴーゴリの生前も死後もさまざまな形で出版された。いくつかの作品を選んだ選集、一つの作品の単行本、イラストつきの豪華本など。そのなかには、誤植や削除、書き換えだらけの不完全なテキストで出版された本や、ゴーゴリの作品を元にしたイラストのみのアルバムまであった。一部を改作した海賊版も出版され、出回った³。

文学作品は、ひとたび世に出たら作家の意図とは関係なく受容されていく。作品が時代や空間を超えて読まれるとき、その読者は執筆されたときとは異なる社会に生きる人々である。こうした読者たちは異なる読み方をする。そして自分たちの読み方にあわせて作品の評価や社会的機能、時にはテキストそのものを変えてしまう。ゴーゴリ作品は大衆向けの海賊版に作り変えられたり、中学生の教材として使われた。またゴーゴリ作品に視覚的

¹ Там же. С. 836.

² Динерштейн. «Фабрикант» читателей А. Ф. Маркс. С. 110.

³ イワン・スイチン著、松下裕訳『本のための生涯』図書出版社、1991年、60-64頁。

なイメージの豊かさを見る人々は、それを強調するかのようによくのイラストをつけた。読者の読み方の違いは、バリエーション豊かな数々の異本を生み出した¹。

チホンラボフはゴーゴリ著作集 10, 11 版を編集するにあたり、これらの異本に見られる原本との相違を「欠陥」とし、「不完全」とした。そして原本であるゴーゴリの原稿に忠実にテキストを校正し、複数のバリエーションも印刷した。これは数々の異本で乱れたゴーゴリの作品を整理し、集大成したものであった。その意味でこれは異本ではない。

しかし、異本というものを、時代や社会ごとに異なる読み方を体現した独自の形式を持つ本として広義にとらえるならば、これは 1890 年代におけるゴーゴリの異本であった。原稿に最も近いテキストが最も正しいとする価値観は古くからあった。しかしこうした価値観に基づいて編集されたマルクス社のゴーゴリ著作集は、ゴーゴリが古典作家として広く認知され、古典への興味が多くの読者の間で高まり、かつ集大成することが意味を持つようにならなくては実現されなかった。

『ニーヴァ』の時代に、ゴーゴリは読者にも出版者にもすでに古典作家として認識されていた。読者たちはゴーゴリ作品を含む古典への関心を高め、出版者たちはそれに十分気がついていて、そして出版者たちは、ロシアの文化的遺産を多くの人々に開こうとする使命感をもっていた。芸術作品は大衆に開かれ、所有されるべき祖国の財産であるという価値観が出版者たちに共有されていたことは彼らの活動から明らかである。

こうした価値観のなかで、マルクスは手書き原稿と照合した完全なテキストを提供した。網羅的かつ正統的なテキストを作ることは、ゴーゴリ作品が古典であるという漠然とした共通認識に明確に形を与え、ゴーゴリの古典作家としての位置を可視化し、不朽のものにすることを意味した。マルクスの文学付録はより純度の高い伝統の創造という志向を形にした出版物であった。

本論文は平成 14 年度日本学術振興会科学研究費補助金による研究成果の一部である。

¹ 異本に関しては外山滋比古『近代読者論』みすず書房、1994 年、66-77 頁を参考にした。

"Сочинения Н. В. Гоголя" под издательством «А. Ф. Маркса»

ОНО Токико

Автор настоящей работы исследует "Сочинения Н. В. Гоголя" (1900-1901), выпущенные издательством "А. Ф. Маркс". Они являлись приложением к иллюстрированному еженедельному журналу "Нива" и выпускались огромным тиражом в 220,000 экземпляров. Автор рассматривает причину такого большого тиража и значение этих изданий в русском обществе на рубеже веков.

Издательство Маркса было известно как издатель "Нивы". Это был самым популярный журнал в России в последней четверти 19-го века. Маркс издавал сочинения классических писателей как бесплатные приложения к "Ниве". Эти сочинения интересовали многих читателей и увеличивали тираж "Нивы". "Сочинения Н. В. Гоголя" – одни из них.

Популярность "Нивы" и ее приложений была тесно связана с развитием массового читателя. По статистическим данным 80-х - 90-х годов 19-го века, число учебных заведений и грамотность населения значительно возросли в России. Но библиотек и книжных магазинов в провинциях было еще недостаточно. В последней четверти 19-го века в России увеличилось количество почтовых путей и соответственно количество почты. Не случайно население в провинциях России так радушно принимали "Ниву", высылаемую по почте из Петербурга. Этими факторами и объясняется большой тираж "Сочинений Н. В. Гоголя".

Однако Маркс интересовался не только коммерческим успехом журнала, но и был заинтересован в просвещении массового читателя. Маркс издал "Сочинения", чтобы читатели "Нивы" познакомились с произведениями русского классического писателя. "Сочинения Н. В. Гоголя" представляли собой полные собрания сочинений Гоголя. Даже самые маленькие записки и варианты включались в них. Издавая журнал "Нива" и его приложения, Маркс старался создать "правильную" традицию русской литературы.